—心の探求—

小説フロイト2

アーヴィング・ストーン
橋本福夫訳

早川書房

心の探求

小説フロイト2

アーヴィング・ストーン
橋本福夫訳

早川書房

THE PASSIONS
OF THE MIND

by Irving Stone
Copyright © 1971
by Irving Stone
First published 1984 in Japan
by Hayakawa Publishing, Inc.
This book is published in Japan
by arrangement with
Doubleday & Company, Inc.,
through Tuttle-Mori Agency, Inc.,
Tokyo.

小説 フロイト 2
—心の探求—
昭和59年5月31日　初版発行
*
著　者　I・ストーン
訳　者　橋本福夫
発行者　早川　清
*
印刷　信毎書籍印刷株式会社
製本　株式会社　明光社
*
発行所　株式会社　早川書房
東京都千代田区神田多町2—2
電話　東京(252)3111(代表)
振替　東京・6-47799
定価　2700円
〈検印廃止〉
0023-904690-6942

小説フロイト 2

——心の探求——

日本語版翻訳権独占
早 川 書 房
© 1984 Hayakawa Publishing, Inc.

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

第七章　失われたアトランティス島　5
第八章　心の暗い洞窟　63
第九章　いかなる人をも幸福とは呼ぶなかれ
第一〇章　追放者　277
第一一章　わが助け、いずこよりきたるか　359

第七章　失われたアトランティス島

1

夏のすがすがしい空気が味わえそうな別荘をさがすために、二人は六月下旬に午前七時三〇分発のゼメリング行きの急行に乗った。ゼメリングはウィーンの者たちにはアルプスの楽園として有名な山岳地帯だった。彼らの乗っていた二等車の仕切り客室にはりっぱな茶色の革張りの座席があり、頭をもたせかける部分にかけてあるリンネルの布には〝カイゼルリッヒ・ケーニクリッヒ〟すなわち〝帝国王室所有〟を意味するK・Kの頭文字が麗々しく入れられていた。これはローマ帝国のS・P・Q・R（ローマの元老院および人民）に相当するものであり、ウィーンの住民が官庁や、煙草や切手を売る小さな店の前を通るたびに一日に何度となく目にする文字だった。最初の真っ暗なトンネルにさしかかった時、ジークムントはマルタのからだに腕をまわしてゆっくりと接吻した。二時間半の旅はまだ始まったばかりで天井のガス燈はついておらず、そのためにそのトンネルは通称〝接吻（キッシング）トンネル〟とよばれていた。マルタは彼の耳にささやいた。

「ジグ、接吻トンネルで夫が妻を抱擁しなかったら、その夫は別の女をかこっている証拠だということを知っていたの？」

列車は今、のびてゆく蔓を支えるための支柱がずらりとならんでいる、山のふもとの丘のブドウ畑を走っていた。列車がプファフシュテッテンに停まった時には、ブドウ酒を売る店の戸口に、新酒ありますという意味の緑の葉で作った輪が掲げてあるのが見えた。道路掃除人夫のまく水が早朝の陽光をあびて消え失せるようにジークムントの医院の患者たちも姿を消してしまったように思えたので、彼は苦笑いを浮かべて呟いた。

「僕も、今年できたブドウ酒のようになまで人を酔わせる新鮮な医学を供給していることを示すために、戸口に草の束でも飾りつけておく必要がありそうだ」

ウィーンの住宅地のそばにあるので〝ハウス山脈〟と呼ばれている山並みの裾野に積まれた干し草は、褐色のカップケーキのような恰好をしていた。列車は雪をいただいた六〇〇〇フィートの双子の山々、シュネーベルク山とラックス山のあいだの丘陵でオーストリア人たちが〝ねこ背の世界〟というあだ名で呼んでいる場所へ向かって登りだした。ずっと前に弟のアレクサンダーが話してくれたことだが、世界でも初めての本格的な山岳鉄道であるゼメリングまでのこの線は、フランツ・ヨゼフ皇帝の後援のもとに夢想家カール・ゲーガの手によって建設されたものだった。峡谷に一六カ所も高架橋をかけ、岩だらけの山を掘削して一五もトンネルをつらねて、海抜三〇〇〇フィート以上もあるゼメリング峠を克服した、このほとんど不可能なほどの大偉業のことを、ジークムントはマルタにも話してきかせた。彼ももっと若いころは、可能なかぎり週末のハイキングにここへやってきたものだった。

グロクニッツ駅では、三人の駅員が列車を点検したうえで、山上へ客車を引きあげる特殊な機関車を先頭に連結するとともに、後部にも後押しの機関車がとりつけられた。クラムではガス燈がついた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

幾つものトンネルの暗闇から高架橋の目もくらむような明るさの中へ出たとたんにシュレーゲルの巨大な製紙工場が見え、ついでマリア・シュッツ教会が目にうつった時、ジークムントは次のような感想を口にした。

「この汽車旅行は、僕の知っているかぎりでは、ダンテの〈地獄篇〉と〈天堂篇〉の相違の最高の象徴だよ。マルタ、君はこの世には生よりも死を選ぶ人たちがいるのを知っているかね？」

「信じられないわ。なぜなの？」

「今、患者たちから教えられつつあるところだよ」

やっとゼメリング駅の広い戸口を通り抜けて村の中を歩きだした時には、午前一〇時ちかくになっていた。二人はつんとくるマツの木の香りや雪のにおいをむさぼるように胸いっぱいに吸いこんだ。彼らのいる所は高地の平野だったが、後方にはさらに高い山並みがつらなり、まっさおな空に氷柱のように聳えたっていた。下方には緑の牧場がひろがり、牛の群れが草をはんでいた。女性の寝巻きのふち飾りリボンのように曲がりくねって山々をぬっている狭い無舗装道路沿いには、赤いタイル屋根の家や灰色のスレート葺きの納屋がひとかたまりになっている村が点在していた。

別荘の多くはすでに借り手がついていたが、正午をすぎてまもなく、こだかいシラカバ林の中に埋もれたようになった感じのいい家がみつかった。そうした家は〝避暑用別荘（ゾマーフォーヌング）〟と呼ばれていた。その家はバーデンの家々のように広々としていたが、スタイルはチロル風だった。つまり一階は石造、二階は木造になっており、窓のよろい戸は緑色に塗ってあって、小さな木造の鐘塔がついており、雄ジカの角が飾ってあった。家主は階下に住んでいた。広々とした二階を借りれば板張りのテラスも使えるようになっていた。テラスの田舎ふうの椅子に腰をおろして食後のコーヒーが飲めるわけだ。家主

の細君が歓迎の意味で新鮮な白ブドウ酒を持ってきてくれたので、ジークムントとマルタはグラスをカチッと合わせ、静かに「愛している」と言いあった。この山荘の家賃はプーフェンドルフ夫人の治療代でまかなわれるわけなので、この山荘をプーフェンドルフ荘と名づけることにした。

〝プーフェンドルフ宮殿〟を借りたのは大成功だった。マルタと九カ月になるマティルデは、昼間はマツの木の香りのただよう暖かさのなかで健康にすごせたし、夜は毛布が必要なほど涼しかった。マリーは夏季の台所をわずかばかりの食器類でたくみに運営した。彼女は皿やなべ、銀器、リンネル製品類を二つの箱に詰め、彼女とフロイト家の三人が一つの仕切り客室全部を占めていた車輛の後ろにつけた貨車にのせてきたのだった。手でさげられるトランク類は客室の頭上の棚にのせた。ジークムントは毎週金曜の夜八時一五分の急行に乗り、一一時ちょっと過ぎには狭い田舎道を歩いていた。そして夜中までには、ベッドの快いぬくもりの中にマルタとならんでよこたわった。

アマリエとヤコプが夏の別荘をもてなくなってからずいぶんたっていたので、ジークムントは両親を招いた。アレクサンダーは鉄道の無料乗車券を持っていたので、日曜日になると登ってきた。「わたしたちのところへ来たいからではなくて、あの一六の高架橋を列車で渡りたいからじゃないの」とマルタはからかった。

アレクサンダーは幸福そうに顔を輝かせて言い返した。「僕は目をつぶっていたって、それぞれの橋の名や番号が言えるんだぜ。ブサールトゥネル（ドイツ語で〝接吻トンネル〟の意）、パイヤーバッハ、シュレーゲルミューレ……」

二二歳のアレクサンダーはジークムントより二インチほど背がひくかったが、大部分は首が短いせいだった。その点を除くとこの兄弟は今でも驚くほど似ていた。ジークムントは、この弟は複雑な個

性の持ち主で、肉親とのつきあいでは気むずかしく、人に対してすぐいらいらするが、仕事のことになると冷静で着実な男だと思っていた。アレクサンダーは深夜までデスクにかじりついていた。彼の唯一の不満は、運賃表の印刷があまりにも小さすぎるので、それを見るためにはもう、細い金属製のつるのついた眼鏡を幅の広い鼻梁にのせなくてはならないことだった。ジークムントのほうは、一〇歳も年上なのに眼鏡なしで医学書を読めるのだった。

「僕が運輸大臣になったら、まず第一に鉄道関係のすべての書類の活字を四倍の大きさにするだろうな。その功績だけでもフランツ・ヨゼフ皇帝は爵位を与えてくれていいはずだ」

アレクサンダーの会社は〈総合料金表〉(アルゲマイネ・タリーフ・アンツァイガー)を配布していた。彼が仕事についた当時、その料金表は粗末な紙二枚にびっしり書きこまれていた。五年後の今、彼はそれをちゃんとした定期刊行物に変えていた。

「アレックス、気をつけろよ。でないとお前はオーストリアの貨物列車の専門家になっちまうぞ」とジークムントは警告した。

「僕はもうそうなっているよ」

居間と食堂の家具には覆いがかけてあり、窓には鍵がかかり、夏じゅうカーテンがはずされ、敷物は巻いて樟脳と新聞に包まれている家にひとりで暮らすのは、異様な感じのものだった。患者は時おりやってくるだけだったので、ジークムントは午後をカッソヴィッツ研究所で過ごした。そちらのほうには、オーストリアじゅうから病気の子供たちが殺到していたからだ。午前中は書物を読んだり、『医学百科便覧』(エンサイクロペディック・ハンドブック・オヴ・メディスン)のために失語症や脳解剖や小児麻痺についての原稿を書いたり、

完成したばかりのベルネイムの著書の翻訳につける序文を書いたりした。その序文の中で彼は、ベルネイム博士の業績は「催眠術を通常の心理的生活や睡眠という周知の現象と結びつけることによって、その奇異さを除き去った点にあり……〝暗示〟は催眠術の核心、催眠術を理解する鍵として確立されている」と述べた。彼はまた、この書は刺戟的な著作であり、マイネルト教授が主張しているような、催眠術はいまだに〝不合理の光輪〟に囲まれているなどという考え方を打破するだけの周到な論理が展開されている、とも主張した。

夜は友人たちと過ごした。エルンスト・フライシュルはできるだけ夕飯を食べにきてくれと頼んだ。彼は孤独だったし、病状もよくなく、発熱してブリュッケ教授の研究所での研究も続けられない場合が多かったからだ。ヨゼフ・パーネットが彼の研究をひき継ぎ、エクスナーと共同して後脳手術後の視覚障害に関する研究で立派な業績をあげていた。フライシュルは、以前の整っていた顔も今では肉のうすい骨ばった顔つきになっていたが、ジークムントの医院の患者の少なさをじれったがった。

「ジグ、なぜ君は全科開業医にならないんだい？　せめて神経科医として生活が成り立つようになるまでだけでも？」

ジークムントはフォークをおいた。

「毎朝診察室に腰をおろして患者がベルを鳴らしはしないか耳をすましているのはやりきれないものですよ。でもね、僕は全科開業医になるには医学の知識がたりないのです。それに、神経疾患の専門医はほんの一握りしかいないのですから」

フライシュルは溜息をついた。「そりゃ、君には頑固さをとおす権利があるがね」

ヨゼフ・ブロイアーのほうは〝頑固さ〟という言葉を〝強情さ〟と言いかえた。彼は《医学週報》

誌を手に取り、ベルネイムの著書へのジークムントの序文を音読した。
「なんだって君は、名前まであげてマイネルトを攻撃したりしたのだ？　これでは猫の首に鈴をつけに行ったようなものだぞ」彼は頭をうつむけ、うわ目づかいにジークムントの顔を見つめた。「猫どころか、ジャングルのライオンにだ。きっと相手は反撃するぞ、ジグ。君はまだ公開の闘技場であの男と闘えるだけの武器は備えていない気がするがね」
　何よりもたのしかったのは、パルクリングぞいのアパートの、市立公園が見おろせる最上階の涼しい部屋でヨゼフ・パーネット夫妻と過ごす晩だった。ヨゼフはほかの若い医者も数人招いていて、みなは居間の開け放した窓の前でカード・ゲームの〝タロック〟をやった。ジークムントもそのゲームをたのしみ、医学のことも、マイネルトのことも、患者がへっていることも忘れ去って、「札をとるか、賭け増しか！」と叫んだり、場の二組のふせた札を見ないで「勝負！」と声をかけたりした。そして、相手が「よしきた」と答えて彼のほうが一六点負かされ、少々がっかりすることもあった。
　ある晩ゾフィーが彼を横へ連れていった。
「ジギ、ヨゼフがひどく咳をするのよ、真夜中にね。一度は血痕を見つけたこともあるの。あのひとはそれをかくそうとしていたわ。なんとか胸を診察する口実を見つけてもらえないかしら？」
「僕はオーストリアでも最高の結核の専門医を知っているよ」
「この夏の残りの期間、わたしたちを山の避暑地に行かせるように、そのお医者様に言ってくださらない？　ヨゼフはエクスナー博士との共同研究に夢中で無理しているのよ」
　ジークムントの夏のひとり暮らしを誰よりも嬉しがっているのはアマリエだった。それというのも、正午の正餐に息子の大好きな物を料理してやれることになったからだ。彼女も五三歳になっていて、

髪には白いものが混じってはいたが、顔はまだふっくらしていて、尽きることのないエネルギーの持ち主だった。彼女が統治するには、今の家庭は小さすぎる帝国だった。ジークムントが力仕事には女中を雇うように主張してきかなかったのだ。それでも時には感情的な家庭になることがあったのは、まだ娘が三人家に残っていてひと間に寝かされていたからだった。姉妹は仲よく暮らしてはいたものの、狭苦しい部屋に閉じこめられているせいで、時おりは金切り声をあげあうこともあった。ヤコプはそういう不協和音が聞こえだすとすぐに家から逃げ出した。アマリエはだれかの味方をしたりしないで、わたしの家庭の平和を保つようにと娘たちをたしなめるだけだった。現実家のアレックスは押し入れにもう一つ洋服をつるす棒をわたし、ベッドの上方にももう一つ棚をとりつけて、当面の問題を解決していた。

自分も父親になった今では、ジークムントのヤコプに対する感情も変わってきていた。以前から彼は叡知とユーモアを兼ね備えた自分の父親が大好きだった。ヤコプは子供たちとは軽い接触を保つようにしていた。だがジークムントと父親とのあいだには、一世代どころか二世代もの相違があったのだ。しかしその相違も今では重要なことではないように思えた。彼はヤコプの友人仲間に加わりもしたし、幼いマティルデに抱いている自分の気持ちの中には、かつてヤコプが自分にそそいでくれたおだやかな愛情に類似したものがあるのに気がついてもいた。父親は彼の最初の教師でもあったし、アマリエについで、彼の最初の崇拝者でもあったのだから。

父親はブラーター公園の森の涼しさが大好きだったので、ジークムントもほとんど毎日散歩のために一時間とっておいて、子供のころ週に一日は一緒に散歩していた昔にかえって父親の散歩のおともをした。二人は腕を組み、世の中の出来事を何かと話しあった。ジークムントは、《自由新報》紙に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com